

米軍の経験からくみ取られたトランスフォーメーションの教訓

ラリー・D・ウェルチ

トランスフォーメーションについて一貫性のある検討をするには、その目的と特徴に関する合意から始める必要がある。トランスフォーメーションの基本目的は、関連する物理的、政治的環境において作戦を遂行するためのより効果的な方法を創り出すことである。効果的なトランスフォーメーションの3つの局面から、広い視野と現実世界の経験に基づく有益な枠組みの両者が得られるのである。それらは次の通りである。

- ・ トランスフォーメーションの特徴
- ・ トランスフォーメーションを可能とする手がかり
- ・ いくつかの強力なトランスフォーメーションの作戦概念

米軍の経験からいくつかの実例を用いるが、この考察は米国または軍隊に特有なわけではない。

1. トランスフォーメーションの特徴

成功するトランスフォーメーションには2つの重要な特徴がある。

- ・ 第1は、トランスフォーメーションは道程であって目的地ではないことを明確に理解することである。成功するトランスフォーメーションの過程とは継続的改善を生み出すものであり、革命的段階が仮にあるとしてもそれはわずかなものでしかない。実際、経験豊富な軍指導者は革命的段階をリスクが高すぎるとして拒否することが多い。それでもなお継続的改善は、能力の革命的变化を生み出すことができる。
- ・ 第2の重要な特徴は、トランスフォーメーションの多くが新技術についてではなく、新しい思考法に関するものだという点である。頭上のB-52からの爆弾投下を指揮する馬にまたがった陸軍特殊部隊の兵士という、今では典型的となったアフガニスタンのイメージは、その好例である。

過去2つの期間にわたる米国軍の能力の変化は、トランスフォーメーションに関して説得力のある実例をもたらしてくれる。地上部隊のトランスフォーメーションは海空軍部隊のトランスフォーメーションよりも本質的に複雑で難しいため、これらの事例は特に教訓的である。

最初の事例は、ベトナム戦争時の米陸軍と、1991年の湾岸戦争でイラク軍をクウェートから駆逐するのに中心的役割を果たした陸軍との比較である。ベトナムでの陸軍は、概念、原理、中間的指導力、士気の点で深刻な傷を負った。15年後、その同じ軍隊は、世界がこ

れまでに目にした中で最も効果的な戦闘部隊の一つに変貌を遂げるという説得力ある証拠を提示した。しかし、ベトナムから湾岸戦争への陸軍の発達を検証しても、いかなる革新的な進歩も認められない。そうではなく、使い慣れた武器や装備の近代化を伴った基準や訓練の継続的改善が、軍隊の明らかな変貌をもたらしたのである。質は変わったが、概念と原理の点では陸軍は依然として、中欧あるいは朝鮮半島での戦争を念頭に編成、装備、訓練されていた。

10年後、米軍のより広範なトランスフォーメーションが明らかとなった。陸軍は再び自らを改編したが、今度は質だけでなく概念と原理についても変更を行ったのである。ここでも革新的な進歩は認められなかったが、3週間でバグダッドまで進軍した陸軍は、湾岸戦争の陸軍からは能力の点で明らかに変貌していた。

空軍と海軍航空隊もまた能力を一変させた。ベトナムでは、軍事目標に対する大きな軍事的効果を生み出すため、戦闘出撃のできる複数編隊が必要だった。1991年の湾岸戦争では、適正な条件下では精密爆弾を投下する飛行機が一機あれば、一回の出撃で複数の目標に対して所望する軍事的効果を生み出すことができた。1991年の湾岸戦争では、この能力は部隊の一部にしかなく、統合作戦には組み込まれていなかった。10年後、いかなる天候の中でも、24時間体制で精密兵器を正確に到達させることが、米空軍の基準となった。さらに、この能力は統合作戦に上手く取り込まれた。1991年の湾岸戦争からイラク自由作戦におけるトランスフォーメーションの第2期は、ベトナム以後の場合と同様、失敗により触発された急速な変化がより多く観察されたことは特筆に値する。この場合、軍隊全体の広範なトランスフォーメーションは、主要な戦闘作戦での圧倒的な軍事的成功の後に行われたのである。

2. トランスフォーメーションを可能とするもの

上記およびその他の経験から、トランスフォーメーションを可能とする一連の主要素を特定することができる。トランスフォーメーションを可能とする関連要因の長いリストを作成することはできるが、4つの要素がとりわけ重要であり、普遍的とっていいように思われる。それらを以下に示す：

- ・ 根底にある動機付け要因としての必要性の認識
- ・ 計画に対する期待の変化
- ・ 上からの指導力と下からの革新
- ・ 能力格差を埋めるための技術の利用と能力の活用

(1) 動機付け要因としての必要性

トランスフォーメーションの最も強力で、信頼できる推進力は、必要性の認識であること

は明らかであると思われる。それは、ベトナムでの経験に続く事例のように失敗を経験して特定されるか、あるいはイラクでの主要な戦闘作戦での事例のように、作戦環境の急速な変化の認識によって特定される。第一の例として、ベトナム戦争での作戦機当たりの命中率が非常に低かったこと、作戦範囲・時間が夜間と天候によって制約を受けたこと、敵の回復力が非常に高く、空からの攻撃を加えるよりも早く損害を修復できたことがあげられる。このため、空軍力は約束された軍事的効果をあげることができなかった。その経験の影響を受けて、空軍指導者は何世代にもわたって、次の戦闘では空軍力が約束された効果を実際にもたらすことを重視した。空軍および海軍航空隊指導者は、作戦機の命中率を倍増し、24時間全天候型の戦闘能力を提供し、適切な標的を、適切な時機に、適切な効果を伴って直接攻撃するのに必要な指揮統制概念や能力を発達させるため、継続的な改善の道を取り始めた。1991年の湾岸戦争までに、少なくとも空軍力の一部はこうした必要性を満足させることが可能となった。

地上部隊に関しては、地上攻撃に先立つ数ヶ月に及ぶ大規模な後方支援体制の構築、およびその構築を可能とする高度な処理能力をもった複数の海港を通じたアクセスが、1991年の湾岸戦争を特殊な事例にしていることが明らかになった。こうした条件は、将来おこりうる作戦で繰り返される可能性は低いからである。こうして、俊敏な部隊、柔軟な思考、そしてより広範囲な任務にわたる能力の拡大を伴った、よりすばやい対応をもたらす新しいコンセプトとドクトリンの必要性が認識されたのである。これらのコンセプトの一部は本稿において後に検討する。

(2) 計画に対する期待の変化

トランスフォーメーションを可能とする第2の主な要因は、作戦に対する期待の根本的変化である。1991年の湾岸戦争以前、大規模な戦闘は長期化し大量の血が流れるものであった。勝利する戦闘もあれば敗れる戦闘もあると考えられていた。最終的に、米軍が敵よりも少しでも優勢となる限り、軍事的勝利を期待できたのである。勝利は軍事的成果で測定されるものであり、勝者または敗者が支払った犠牲によって、あるいは政治的成果によって測定されるものでもなかった。

湾岸戦争後、米国防省は、「共同構想 (Joint Vision) 2010」を公表した。これは、想定しうる幅広い戦略シナリオを通じ、米軍が立ち上がりから敵を支配する能力を高めていくという予測を文章化したものである。この予測における変化は次の認識を伴う。21世紀は、米国と同盟国の安全保障上の利益への予測不可能な課題に特徴付けられるという認識である。この一連の認識は能力対応型 (capability-based) 部隊という概念を導いた。能力対応型部隊は予想される脅威のいかなる組み合わせにも、また予想できない脅威にも対処することが期

待される。したがって、能力対応型部隊は、脅威対応型部隊よりもはるかに要求の高い水準を満たすよう構想されている。能力対応型部隊の概念は、トランスフォーメーションの強力な推進力となってきたのであり、現在もそうであることに変わりはない。

(3) 上からの指導力、下からの革新

第3の主な動機付け要因は、トランスフォーメーションに対する上層部からの強力な関与と上層部が、下からの革新を奨励し、受け入れる態勢にあることである。ベトナム戦争後の紛争では米軍が期待される軍事的効果を確実にもたらせるよう、軍および文民指導者は、熱意を持って取り組んだ。作戦条件に関わりなく、望まれる効果を達成できる能力に重点を置いた一連のプログラムを、後に続く世代が継続して遂行できるよう、継続的改善要求が制度化された。この重点は数度に亘る指導者の交代やプログラムが引き継がれることで継続した。

トランスフォーメーションはまた、概念、ドクトリン、訓練、および装備の革新によっても強力に可能となった。訓練、演習、および現実世界の作戦など軍の日々の活動に勤しむ者は、ユニークかつ特に貴重な革新の源なのである。変化の速度が増すにつれ、より早い適応が要求されるようになっていく。適応性を推進する主な力は、あらゆる段階での作戦部隊からの革新なのである。

(4) 能力格差を埋めるための技術の利用および能力の活用

1970年代後半、米軍指導者は一連の長期的目標を秘かに設定した。たとえば、陸軍の目標は、装甲戦闘車両が走行中に一撃で破壊する能力の獲得であった。その当時、これは困難な目標であり、おそらくは達成不可能な目標とみなされていた。1991年の湾岸戦争までに米国の機甲機械化歩兵部隊員は、素早い操縦で高い命中率が得られるよう訓練され、装備されていた。走行中に第一撃で殺傷することは、機甲部隊における立証済みの戦闘ドクトリンの一部となっていた。

米空軍指導者が定めた目標には、世界的な能力に関する2つの長期的目標があった。1つは、世界のどこであろうと、昼夜いかなる時でも、いかなる天候でも、所望の軍事的効果を達成するのに必要な正確さと威力をもって、いかなる標的をも攻撃できることであった。もう1つは、いかなる標的の所在をも攻撃に必要な精度で確認できることであった。1990年中ごろまでに、米空軍と海軍航空部隊は、2～3の例外を除き、第1の目標を達成する道はかなり極めていたが、第2の目標に向かってはなかなか捗らなかった。恐らく、第2の目標の方が第1の目標よりもはるかに困難だったからであろう。軍事部門や防衛関連の請負業者は、標的の所在特定より標的の攻撃に対する能力の方が優れていたと思われる。しかしここ

でも、第1の目標を達成するための技術を実戦配備し、能力を獲得するには、原始的な、日中、晴天時だけの誘導空対地兵器から、今日の高度に精密な、全天候型誘導兵器にいたるまでの継続的改善を必要としたのである。

ボトムアップ型の改革はまた、技術と能力を戦闘能力の格差に適合させようとする際、強力な役割をはたすことがある。たとえば、敵が道端に仕掛けた爆弾を爆発させるためにおもちゃの自動車のリモコン装置を使用していることをイラク駐在の米陸軍兵士と海兵隊員がを見つけ、それによって彼らが自らのリモコン装置を手に入れたことである。彼らは「スロットル」をテープで固定して全開にし、車両のフロントに装置を取り付け、殺傷半径内に入る前に爆弾を爆発させたのである。

3. 米国の過去10年間の経験におけるいくつかの強力なトランスフォーメーション概念

20世紀から21世紀に移行する過去20年間に、戦闘能力のトランスフォーメーションを可能にし、促進するさまざまな革新的な作戦概念とドクトリンが生まれた。これらの概念的基盤は、急速に変化する世界、情報技術の進展、日々の作戦経験、ならびに上級の文民・軍人指導部による強力な支援に根ざしていた。貢献者として、米国防省、防衛関連請負業者、非政府団体、および同盟国の同様の機関のさまざまな団体が挙げられる。これらの概念は戦争ゲーム、テスト、演習、および作戦経験を通じて定義され、洗練され、検証され、あるいは拒否された。それらはまた、急速に変化する作戦環境に対処する必要性によっても強力に推進された。拡大する革新的概念の中には、新しい作戦方法が画期的成果に近い結果を生んでいる5つの広範な領域がある。それらは次の通りである。

- ・ 効果に基づく計画と執行
- ・ ネットワークによる情報共有、決定の優位性、および指揮統制
- ・ ディストリビューティッド・オペレーション
- ・ 統合・相互依存・併行型共同作戦
- ・ 継続的適応

(1) 効果に基づく計画と執行

軍事力の妥当性を評価する際、長年の慣行として、インプットベース、すなわち、師団、編隊、戦艦、およびその装備の数から説明する。このような慣行の中では、単独プラットフォームおよび小部隊の能力の大幅な増大は考慮されない。例えば、アフガニスタンの上空を飛び回っている重爆撃機は一機しかないが、地上作戦を支援する高精度の射撃能力を迅速に供給することができる。そうした少数の爆撃機は、事実上、戦場のどこでも時宜にかなった効果的な

支援を提供することができる。こうして、アフガニスタンでは、上空の重爆撃機と戦闘機を利用できる小部隊が、通常の師団以上に匹敵する迅速対応射撃能力を指揮し、敵部隊の壊滅を招く驚異的な効果をもたらす攻撃が可能となったのである。イラクでは、支援地上部隊から何キロも離れた中隊規模の部隊が、安全確保と任務の成功を支援するための空軍、海軍および海兵隊航空機からの正確な射撃能力を、24時間体制で、いかなる天候でも求めることができた。利用できる海港能力に限りがあったため、より小さな部隊で大部隊の効果を達成するための新たな手法が必要とされたのである。この能力を提供するために必要な概念と資材能力は、すでに手中にあった。

(2) ネットワークによる情報共有、決定の優位性、および指揮統制

現代の情報技術では、いかなる敵よりも優れ、かつ時宜にかなった意思決定をするために必要な情報があらゆるレベルの指導者へ提供できる。さらに主要な作戦決定を、戦術レベルでの複雑なものに対し最もセンスをもつ者に委任することができる。必要な情報と、各作戦の意図する成果に関する明確な理解があれば、下位の指揮官は、敵よりも、また戦術状況からさらに離れている上級将校よりもより速く、かつ優れた意思決定ができる。これが決定の優位性であり、情報の優位性よりも信頼できる概念である。

情報の優位性とはインプットのことであり、有効性には疑問がある。友軍が成功するのに必要な情報の断片を入手するだけでも、敵は成功しうからである。アフガニスタンでのボラボラ作戦はその最たる例である。その地域にいたと思われたアルカイダ指導部を捕獲するため、友軍は詳細な情報を必要としたが、アルカイダ指導部は脱出するための情報だけで事足りた。反対に、決定の優位性は、アウトプットを評価する。アウトプットがより優れたものであればあるほど、時宜にかなった決定となる。

ネットワークにより可能となる情報共有、ならびに戦術レベルでの決定の優位性は共に、指揮統制への新しい強力な手法を可能とする。上級指揮官が下位の指揮官に対して、なすべきこととその方法を命じる代わりに、上級指揮官は下位の指揮官にしてもらいたいこと、すなわち、上級指揮官が望む成果を伝える。これは指揮官の意図として部下の指揮官に伝達される。情報共有はまた、下位の指揮官がその経験、置かれた状況の判断および現在の理解を動員し、任務目標を達成する能力の強化に寄与することによって上級指揮官に部隊が目標達成に向かってどのように行動しているかの構図を継続して提供することが可能となる。これにより上級指揮官は解放され、その注意を困難な現場、資源の移転、必要に応じた意図の修正に向けられようになる。

ネットワークによって可能となる作戦に対する重要な核心は、機密情報へのアクセスを認める基準が「知る必要」から「知る権利」へと移行する点である。この概念により、情報保

持者は適性を管理できるが、適切な資格を有する者によるアクセスは、情報保持者ではなく、情報を必要とする個人が管理しなければならない。

これは多くの者にとって受け入れ困難な考え方であるが、ネットワークが可能とする効果的な作戦にとって必要不可欠なものである。

(3) ディストリビューティッド・オペレーション

ディストリビューティッド・オペレーションとは、目標達成に向けて必要とするだけの戦闘空間を、必要な期間だけ占領するために部隊を使用するというものである。これは空と海の戦闘では長い間中心のドクトリンだった。空と海の領域の継続的占領は実行可能な概念ではないからである。ディストリビューティッド・オペレーションは今では地上戦にも適用できる。過去には、目標への途中にある領土を一掃し支配するため、大きな編成が並んで前進した。ディストリビューティッド・オペレーションの目標は、戦場をすばやく移動し、敵のバランスを崩しておきながら、兵站線を保護し、主要地点を支配するために十分な後方部隊のみを配備することである。この概念によって、多国籍軍は主要戦闘3週間後でバグダッドに到達できた。この概念にはリスクが伴う。すなわち、目標への到達が軍事上決定的になると想定する点である。その想定が、バグダッドにおけるように妥当でないことがわかった場合、長期間広い領域で安全を提供する必要があるであろう。

(4) 統合・相互依存・併行型共同作戦

統合された相互依存的作戦は、調整された共同実施作戦とは非常に異なる。イラク自由作戦の主な戦闘局面は、米国軍事史初の統合・相互依存・併行型共同作戦といえる。1991年の湾岸戦争では、地上部隊は別々のレーンで作戦を行った。空と陸の作戦は連続して行われ、100日間の空爆後、大規模な後方支援構築を伴う100時間の地上攻撃が続いた。地上攻撃中は、空からの支援への直接的依存は最小限にとどまった。戦術的な空軍と武装ヘリによる作戦は、空域割り当てによって別々に保たれていた。

対照的に、イラクの自由作戦の主要戦闘局面では、空と陸の攻撃は別々ではなく、初めから終わりまで、陸空海の統合作戦による一つの共同作戦であった。地上部隊は、状況把握に空と宇宙からの監視に依存し、不可欠な支援としては空から発射される共同射撃に依存した。この統合と相互依存は、ネットワークが可能とする情報の流れと共に、すばやく移動するディストリビューティッド・オペレーションを支援し、最小規模の部隊による目標への素早い前進を可能とした。それは一つの利用可能な海港での限られた処理能力を通じて支えることができるものだった。

(5) 継続的適応

条件が変化し、不意打ちに襲われるため、戦場での成功は常に適応を必要としてきた。作戦を調整し、調和させる必要と、変化する条件に素早く適応する必要との対立がつきまとう。素早く継続的に適応する鍵は、上記で検討した指揮統制とネットワークが可能とする概念に見出せる。現場の下位の指揮官は状況に深く関わっており、進行状況および指揮官の意図を達成するのに必要なことを理解するには最適な立場にある。しかし、最下位レベルの戦闘作戦は政治戦略的影響を持ちうる。例えば CNN またはアルジャジーラで放送される場合、イラクでの小隊長または中隊長の対応は、はるかに広範な政治的影響を持ちうる。したがって、必要とあればより上級の、ベテランの判断が入手可能であること、上級指揮官はその必要性を瞬時に認識できることを確実にする必要がある。これは、複数レベルのネットワーキングによって実現可能であり、そうすることで指揮官は指揮下にある進行中のディストリビューティッド・オペレーションを認識し、必要な場合には部下の指揮官がもたらす革新的効果を損なわずに介入できる。これらの概念は複雑なように聞こえるかもしれないが、イラク紛争の安定化と再建局面では、日常的に首尾よく行われているのである。

4. 結論

21 世紀の環境は、急速な変化と、米国および同盟国に対する多様で予測不可能な脅威、およびあらゆるレベルでの軍隊の革新と適応性に対する未曾有の要求を特徴とする。戦略的、作戦的、および戦術的レベルでの作戦を分かつ境界線は、最下位レベルでの戦術的作戦が戦略的な政治的影響を持ちうる点で、あいまいになっている。さらに、技術は前例のない軍事力を下位の指揮官の手にゆだねる。概念および姿勢の転換は、こうした 21 世紀の諸課題に答えるために不可欠である。トランスフォーメーションの旅には測定可能な道しるべこそあれ、世界の環境が変化をやめない限り終点はない。それが起きる見込みもまたない。